

動機論序説 (1).〔第三回〕

佐野健治

第1部 (印刷稿) に見えるラスコーリニコフの 犯行の動機 [つづき]

N-0-1 ドストエフスキーが『罪と罰』を構想する過程で、ラスコーリニコフの犯行の動機についての考えをどう展開させ、定着させていったかについて示唆を与える資料の中に草稿がある。三つのブロックに分けられたいわゆる創作ノートは、作品の構想と創作内容が数ヵ月のうちに大きく変化し推移していった様子を物語っている。この残存草稿の全体を通読し、そこから、ラスコーリニコフの犯行の動機についてのドストエフスキーの考えが直接または間接に示されていると思われる文と単語を抜き出し、それらを動機 (1). (2). (3). の規範 (1-18参照) に拠って分類した。これら (1). (2). (3). のグループは、さらに内容によってそれぞれA, B, C…の小項目に分け、小項目に順番をつけた。こうして、それぞれの単語は、各規範においてクロノロジーに従って配列されているほか、上述の二通りの分類を経て、最も妥当と思われる記号と順序数字を先頭に冠している (例えばA 1, A 2…のように)。また引用した文と単語の中の、選択するさいに特に対象とされた語句を明示するために、これを〈 〉で囲んだ。

N-0-2 以上の動機 (1). (2). (3). に加えて、盗んだ金品を特に問題にして、動機 (4). の項を立てた。ラスコーリニコフがアリョーナ・イヴァーノヴナから強盗した獲得物の処理について、ドストエフスキーは二転三転して多くの代案をノー

トに書いている。これはおおむね動機(2).と動機(3).の両方に関わる問題であるが、分量が多いことと、犯行の動機を直接左右するような選択の一つであることから、別に扱った。

N-0-3 ノートは作家の覚書であって、内容はプラン、梗概、人物の性格、そのリスト、思想、会話のメモ、場面、さまざまな長さの破棄した稿等からなる。ノートの内容は、それが書かれた時期によって異なる作品の構想に対応しているはずであり、またノートは本人にしか分らない読み方の方法があるかも知れない。それは、他者の読むことを予期して書かれた文ではないし、作品においては当然の比重をもって扱われるべき多くのことは当然に書かれていないだろう。これらの内容は均一な取り扱いをしてよい対象ではない。以上のようなことを考慮しながら、ここに表記された言語の範囲内で、ドストエフスキーの考えた動機の形質とそのおよその枠組をこれらのノートから取り出そうとした。これは動機を一枚の複合的なフローチャートに書き込む試みのための一つの準備作業である。

N-1-1 動機(1).

動機(1).は人間のからだの肉体的、精神的な働きがそうであるように、意志によって制御しえない行為を生む(行なわせる)或るものを指す。それらの、意志によって制御しえない行為には、さまざまな変種と擬似的なものも含まれる。動機(1).は、一般に、ラスコーリニコフがそれを行為として意図したり自覚したりする以前に、彼においてその行為を既に開始している場合とか、あるいはそのように見える場合を指し、またその行為への衝動をひき起こすもの、支離滅裂なたわごと、幻覚等をも指す。動機(1).として創作ノートから拾った語句と文は次のような要件を含む。

N-1-2 A, 衝動——憎悪、殺意。これは初動的、無意図的で、自からなる

ものであり、彼を何らかの行動へ駆り立てたかも知れない。殺意の発動と実際の身体的動作との関係、あるいはそれと次の B、C 項との関係は、しかし、単純に直結するものとは必ずしも言うことができない。

B、宿命、悪魔、運命等の、自己を超越した仮想の支配者のもとに行為する（させられる）という強迫観念。

C、気違いのようになった状態、病気のような状態、幻覚という意識→半意識。例えば、C 1「…あの日までの 5 日間、ぼくは〈気違いのように歩きまわっていた〉。ぼくがその時気違いだったとは、ぼくは絶対に言わないし、この嘘で自己弁明はしたくない」は、ラスコーニコフの半意識というものをよく説明している。

N-1-3 第 1 稿 残存草稿の断片

A 1 ほんとにこれが永遠に、永遠に続くのだろうか！ 明日はここを出よう。おお、おれはあいつらが〈心底憎い！ ひつつかまえて、一人残らず斬り殺してやりたいくらいだし、おれはザミョートフを斬り殺してやる〉！ おお、自分が呪わしい。おお、呪わしい病気…… [II-3 相当部分] 7-72

N-1-4 第 1 稿 準備資料 (1).

A 2 出かけた。〈激怒、冷たい怒り〉、計算。この神経の乱れは何のためだったのか。7-76

A 3 妹について。母について、妹についての物語。「〈おれはあの男を殺してやりたかった〉、だがそのころおれは恋に心を奪われていた」。おかしな恋。7-80

B 1 〈あれは悪魔だった〉。さもなければどうしておれは、あのすべての困難を克服することができたろう。……等々。7-80

B 2 〈おれはあれをやらねばならなかった。(意志の自由はない。宿命論。)>
7-81

A 4 〈憎悪がぼくの息を詰らせた〉。ぼくは横になった。回想。馬が棍棒で。
(ミーチャ。)…7-83

A 5 彼は〈憤怒にわれを忘れて〉外へ出ると、ラズミーヒンのところへ行く。
ガスについての会話。7-83

A 6 「おお、もし誰か、誰かおれを哀れんでくれたら。だが何のために哀れむのだ。愚かしさのためか、〈けだものじみたエゴイズムのため〉か、粗暴と恥知らずのためか、失敗のためか、やったことの無益さのためか、唾を吐きかけられるだけだ、恐怖があるだけだ、嘲笑があるだけだ」。7-85

B 3 N・B 「考えてみよう、何のためにおれはこんなことをしたのか、どうして決心したのか、これは〈悪魔の仕業だ〉」。7-86

N-1-5 第2稿 残存草稿 裁判

C 1 ……あの日までの5日間、ぼくは〈気違いのように歩きまわっていた〉。ぼくがその時気違いだったとは、ぼくは絶対に言わないし、この嘘で自己弁明はしたくない。(たとえそれにぼくの救いがかかっていようとも、一言も嘘は言わない。——抹消) 7-96

B 4 ……自分の計画に、それを実行に移すことに、すっかり呑みつくされていた。……もうそれまでにすっかり考えつくし、すべてを決めていたからだ。「早く決行してきまりをつけ、なんとかこれと手を切りたい思いに、むしろ機械的に引き寄せられていた。逆らうことはできなかった。…」…7-97

B 5 ……おれは〈見えない何かに惹かれているのだろうか〉。おれは、なぜそれを言うことを恐れているのか、知っている。欄外に。(1). 〈何をおれは恐れているのか、何をおれは自分で自分に隠しているのか〉。……7-120

C 2 これは憂愁じゃない、〈病気だ〉、しまいにぼくは決めた、〈これはあれではない Это не то〉。これはこの一月何度か現われている。〈これは熱病

だ), もしかしたら飢えのせいかも知れぬ。憂愁ではない。(病気が治ったら, なくなるだろう。——抹消) 7-120

C 3 ……そうとも, これが神経に追い討ちをかけたんだ, 慣れないからな。
a. <神経と幻覚>。b. <なぜ, おれはあの時。誰にとって他人なのか。なぜおれは他の「遊星」に>。あのベンチで, この言葉がどこからおれの頭に来たのか。(どうしておれはあのベンチであんな嫌な気持ちになったのか。おれ一人が俺自身に対する裁判官ではないではないか。もちろん, c. <幻覚 бред [うわごと]>だ)。——抹消) おれは事実を耐えられなかった。なに耐えられなかったら, これから耐えるさ。だっておれは, d. <この幻覚がいずれ現われるに違いないことを, 予め知っていたじゃないか, もう一月前に予告したじゃないか>。……7-121

B 6 新しいプラン [改行] 犯人の物語 [改行] 8年前 [改行]……外へ出た。リザヴェータ。[改行] <それはあまりに思いがけないことだったので, わたしはやはり自分が殺すことになるのだとは, 考えもしなかった>。苦惱。オアシス, 水。……7-145

N-1-6 第2稿 準備資料(2).

B 7 章の一つは次のように始まる。<ぼくは自分の身に起こったこの愚劣なことが理解できない>。7-137

B 8 それとも, われわれの知らぬ, そして <われわれの内部で叫ぶ自然の法則があるのか>。夢。7-137

N-1-7 第3稿 準備資料(3).

B 9 N・B 彼が <殺人の方へ引っぱられて行ったとき, (自分から), それはよくあることだ>。7-149

A 7 おれはあの老婆が <大嫌いだ, 今は, あの後の今は特に, 許すことができない。あれが生き返ったら, おれはもう一度殺すかもしれない>。7-184

N-2-1 動機(2).

動機(2). は、老婆殺しに先行して形成された老婆殺しの理由、意識、観念、理論、論理である。

N-2-2 作品では、殺人はほとんど偶然に行なわれるという印象を与えるための工夫が施されている。ここで、偶然に行なわれるというのは、空[そら]事の、空白な思考、無駄な考え、下らぬ思想 *праздная идея* であると感じながら頭の中で弄っていたものが、突如として、今の、現にここに在る、現実的な、本当の、実際的な思考 *настоящая идея* となってラスコーニコフを動かし、そのことによって彼はむしろ驚かされた、という意味である。第2稿準備資料(2).に見える構想はこれを強調する。

動機(2).のために取り出した文と単語を次の二つの小項目に分けた。

A, アイデアの発生とその自覚の過程を描き出す。

B, 思いがけなさで偶然の意識と実行の関係。

N-2-3 第2稿 準備資料(2).

A 1 [作品の構想] 第1部 [改行] <算術>。7-138

A 2 第2部 [改行] それはこんなふうに起こった。リザヴェータの会話を小耳にはさんだ。その時おれは恐ろしくなって自問した。『<では、あれはただの空事の考えではなく、実際的な考えとしておれの頭の中にあったのか> Да неужели это не праздная идея, а настоящая была у меня в голове?』。7-138 別の構想のメモは次のようである。

A 3 「小説の書き出し [改行] 調子。[改行] 最初に。たとえば、老婆のところへ下見に行った、a. <だが軽い考えで、それを実行するなどとは、自分でもまだほとんど信じていない>。b. <ただ何となく、万一にそなえて>。[改行] それから。継続、およびさまざまな無関係なこと、ユーモラスなものまで。それが実際に起こりうるとは、自分でも予期していないように。[改行]

B 1 「その先。〈殺人はほとんど偶然に行なわれる。『おれは自分でもこんなことは予期しなかった』 極度の恐怖と病気の物語。これはマルメラードフの死で終る。」「N・B この犯罪そのものから彼の精神的成長が始まる。それまで存在しえなかったようなさまざまな問題の可能性が生じる。〔改行〕最後の章。徒刑地で、彼は、この犯罪がなかったら、このような問題、願望、感情、志向および発達を自分の身に獲得することはできなかつたろうと語る」。7-140

この構図では、(1). 殺人はほとんど偶然に行なわれる。ラスコーリニコフは自分でもこんなことは予期しなかった。(2). この犯罪そのものから彼の精神的成長が始まる。(1). は結果として(2). をもたらしたというのである。

N-2-4 第3稿 準備資料(3).

A 4 [もう一つのプラン] 主要なこと。N・B a.〈この考えはもうかなり前から彼の頭の中に居座っていたのだが、いつ迷いこんだかは、説明が難しい〉。b.〈数学〉。c.〈どうして、何が〉(作者からは、最も難しい章。きわめて厳粛に、しかし微妙なユーモアをこめて)。〔改行〕家へ入った。苦情を言う。おかみと悶着。また外へ出た。リザヴェータ。7-146 [改行]

B 2 〈それはあまりにも思いがけないことだった〉。〔改行〕殺人と極限の恐怖。7-146

A 5 はじめに。老婆を訪ね、時計を質に入れる。とはいえ、彼はよく観察する。〔改行〕そのあとで手紙、並木道、不快な出来事、人類に対する憎悪、そしてこれはまったく思いがけないことではない、というのは、正直のところこれはもう前々からあったことだからだ、だが今はじめてそれが完全に明確な形を取ったのである。〔改行〕

B 3 それから、〈今度はもう完全に思いがけなく、——リザヴェータ〉。ここで転換と苦悩。〈そしてそれから突然、実行、そして極限の恐怖〉。……7-147

A 6 N・B N・B N・B [改行] 調子。〔改行〕第3章あるいは第4章。〈この考えがもう何度か訪れたことを、わたしは告白しなければならぬ。N・B

このようにして犯罪をより自然なものに説明する〉、しかし真剣さは保つこと。この完全な真剣さは、ラズミーヒンのところの夜の集りで、彼の悪魔的な傲慢さの中にも現れなければならない。7-149

A 7 a.〈算術の後で〉、センナヤ広場へ出ると「b.〈どうしておれは斧を用意したんだ〉。c.〈なぜおれは思案したんだ。なぜおれは歩数を数えたんだ〉」。7-151

A 8 並木道の後で。家へ戻ってから、〈斧の方がいいという考えが、どうして彼の頭に浮んだのか〉……その他。あの音が頭の芯にひびいたので、彼は逃げ出そうとした。そこへリザヴェータが……7-152

A 9 N・B リザヴェータの会話の後、センナヤ広場から戻ると、彼は寢床に横になった、そしてここで、a.〈斧のことを考えたことを数語〉、そして「b.〈何のためにおれは老婆のところへ下見に行ったのか〉」。7-152

N-3-1 動機 (3).

動機 (3). は、犯行の後に、ラスコーリニコフまたは他者が、犯行について、従って動機 (1). (2). について行なう理由づけと説明である。このために取り出した文と単語は、次のような小項目に分類した。

- A, 老婆と下劣な人間の価値と善行による償いの算術。
- B, 偶然によって支配されるという意識。
- C, ナポレオンの専制者への転換。
- D, 挫折と民衆へ跪拜。生活は算術を却下する。

N-3-2 第1稿 準備資料 (1).

D 1 彼が、ついに、簡明に公式化し、決然と自分に課す重大な問題。〈いったいなぜおれの人生は終わったのか〉。不満のつぶやき、だって神は存在しないじゃないか等々。7-81

A 1 だが、おお、なんとという侮辱をこめて。おお、a.〈人間はなんて下劣な

んだ、なんて汚らわしい〉のだ……いや！ b.〈まず彼らを掌握して、その後に彼らに善を施こしてやる〉のだ。7-83 [改行]

C 1 c.〈だがこのままでは、彼らの目の前で不様に破滅して、彼らの嘲笑をまねくだけだ〉。7-83

A 2 ここで彼の空想が始まる。妻について、子供たちについて。「どうして言わねばならないのだ。a.〈善行でつぐなおう。善行に没頭するのだ〉」ソーニャ、官吏の娘。Veuve Capet (カペ未亡人), b.〈全体の幸福についての夢想〉。[改行]

D 2 c.〈しかしすべてがうまくいかない。ついに憎悪〉……「d.〈おれはにわとりだ、おれは馬鹿だ〉」[改行]

C 2 e.〈ナポレオン〉その他。[改行] 彼女の足に接吻した。(結末。) f.〈民衆に跪拜。自白〉。7-86

A 3 N・B (a.〈ここで事のすべての分析が始まる〉。b.〈憤怒〉, c.〈貧のどん底, 有益〉, d.〈必然の考察。そして論理的に行なったのだという結論になる〉。) 7-86

A 4 「いったい何だ, a.〈おれが有益な人間になりえないと言うのか。おお母, 妹, みんなあなたたちのためなんだ, 愛する人たち〉。[改行]

D 3 b.〈老婆, リザヴェータ。可哀そうに, どうして彼らはおれに出会ったのか〉」7-89

A 5 ここで coup de maitre (練達の一筆)。a.〈はじめは危惧があった。それから恐怖と病氣〉, そしてずっと性格が表面に現われなかった。ところが, b.〈ここで不意に全性格がその悪魔的な力の全貌を現わし, そして犯行へのすべての動機が分るようになる〉。7-90

A 6 おれは自分のプログラムを作成した。(完全に気力を取り戻し,) a.〈仕事に没頭する, 働く, 靴直し, 手職を身につけるか, あるいは株式取引所へ行く。……仕事を探す。何年も, 何十年もわき道に外れぬことだ。人びとに何も頼まないし, かれらの友情と愛を必要としない。人びとなしで生き抜く。若き

日のささやかな滑稽な罪に対して、山のような善と利で支払いを済ませて、誇り高く死ぬ。b.〈老婆の金には手を付けない〉。c.〈つまらぬ。すべてはつまらぬことだ——恐れることはない〉。[改行] だがマルメラードフの娘への愛の成長が、彼を迷わせる。7-90

A 7 ……夜遅く彼は封を切っていない母の手紙だけを持ち、金は主婦への払いにするために鍵を掛けていない戸棚の引出しに残す。行って、a.〈石の下から財布を取り出す。クレストフスキー島で数える〉。それから母の手紙を読む。b.〈それから自分を裁く〉。気を取り直す。自分の犯行の分析、「c.〈いや、それは違う。おれは殺す権利など持っていなかった。しかし一切の責任を取ろう〉」。……7-91

A 8 ペストリャーコフ、たしかに、a.〈あの老婆は誰にも必要のない存在だ〉。アリストフ、あんな老婆はあれでいいのさ。とすると、あなたの考えでは、罪はないのか。b.〈罪はある。それも偉大な罪が〉。ではあなたは、構わんと言うのか。c.〈算術の理論だ。ドイツ人の産物〉。わが身に担った道徳的責任……等々。[改行]

D 4 アリストフは狂喜 (d.〈これだから生きていくことはいい〉、結構)、[改行]

A 9 つまり e.〈この理論で或る者が他を排除できるわけだ (お前はより必要が少ないと言って)〉。これが唯一の原因なのだ、力と恐怖だ。…… [改行]

D 5 「あなたももう少し暮らしたら、f.〈犯罪には算術以上のなにものかがあることが分るよ。あなた方は算術だが、ここには生活がある〉。まあ、(犯罪の)不幸にあわないことですな。それにあなたの論文からもわたしはこれを察しましたよ。これはみな理論です。それでは、実際にはいかなる犯罪もないことになりますよ」。[改行] それはそうと、あなたはもう大分前からぼくに目を付けてますね」。[改行] 予審判事。そう、耐えられないでしょうね。あなたは、つまりあなたは、耐えられないでしょうね」。7-93

N-3-3 第2稿 第2部第2章の断章

D 6 ……a.〈あの血を避けることができるなら、自分の血を渡そう〉、そうだ、おれは知ってるんだ、おれは何を恐れねばならんのだ。b.〈おれは——老婆の頭の上に落下した煉瓦だ。おれは——老婆の上に倒れてきた木材だ〉。そんなことは前もって分っていた。ところが、c.〈今あのベンチから離れると、急に考えが変わった〉——そうだ、d.〈これは疲労だ、飢えだ、病気だ、神経だ。少し治療すれば、病気も神経も治るさ〉。(訂正 おれはおじけづいていた。だが病気と神経が治り、幻覚におそわれなくなれば、おれは意識的にわが身に引き受けた課題を恐れやしないさ。) e.〈おれは生活を始めに行くのだ。どこへ? ある男のところへだ、これはもう一月も前に、その翌日にこの男のところへ行こう、そしてそこから新しい生活を始めよう、と決めていた〉のだ。7-128

N-3-4 第3稿 準備資料(3).

D 7 それから。〔改行〕こんな考えが彼の頭に浮んだ、「でも、〈何のためにおれはみんなより高潔になりたいのか〉」7-146

A10 小説の主要思想。〔改行〕その後、彼女との話し合い中、彼は、〈償うことができる、善人になれる、これは数学なのだという主張にたえず戻る〉。7-146

B 1 〔改行〕極限の恐怖の後、翌朝、彼は奇妙な精神状態で目を覚ます。すなわち、あの事件についてまったく平静なのである。彼は自分に驚いたほどだ。彼は昨日居酒屋で恥をさらしたことをふと思い出す。「あれは挽回しなければならん」と彼は考える。それから、a.〈記憶がさかのぼって行って、彼は事件の全貌をすっかり思い出し、それがみなどれほど危険なものであったかを悟る。ぞっとする。すべてがほとんど偶然に行なわれたことを、自分で意識し認める〉。(b.〈抗しがたい力に惹かれた、引っぱられたのだ〉)、今なら恐らく、あれが終っていないとして、c.〈どんな保証があったとしても、もう再度あんな危険を冒すことはあるまい〉。もちろんきっとやらないだろう。〔改行〕

A11 d.<しかし、それでも、すべてが正しい論理的思考から生れたものであることを意識する>。e.<狂気はなかった。絶対になかった。彼は憤然としてそれをしりぞける>。f.<だが、もうなされてしまったからには、彼はそれを利用する。彼はその償いをする>。[改行]

D8 g.<それにしてもお前は盗んだじゃないか！ おお、自分の良心とどんな取り引きができるというのだ。どうしておれは、心の中で恥ずかしくないのか。これはそこに罪がないからではないか>。He оттого ли, что тут нет греха. h.<殺すということは、しかし、恐ろしいことだ。流れた血の光景、老婆、あわれなりザヴェータ>。おお、i.<おれは償うぞ、しかしこれはなんという苦しいことだ！ 7-147

D9 N・B 重要なこと。彼がさまよい歩き、a.<旋風の時>、いや、b.<あれは愚劣ではなかった、あれは若さではなかった、あれは偶然ではなかった、あれは信念だった、あれは人格蔑視だった>。7-152

N-3-5 以下に掲げる①～④の各項は、最終印刷稿〔第3稿〕に見られるラスコーリニコフの主張を集大成する四通りの梗概である。ここから主要な文と単語のみを取り出して、その早見表①'～④'をつくって次に掲げる。

- ①' 一步を踏み出す必要。ぼくには権力が必要。現状の否定。より多くを必要とする。行き先が分らない。母のため。自分のため。
- ②' 支配することを望んでいる。その手段をまったく知らない。早く権力を握りたい。殺人の考えは既定のもの。
- ③' 殺人をしても、差し引き善行のほうが多い。
自分のためにやった。善行の必要はない。
要するに出口はなかった。
- ④' 善行のためではない。権力のためだ。権力は善行のために必要。
法律はみんなのため。選良のためには扶養。
罪のために苦悩がある。

① a.〈ぼくは若いから、分らない。誰がそれを予知できるか、それすら分らないのだ〉。b.〈だがぼくは一步を踏み出す必要があった。ぼくには権力が必要なのだ〉。c.〈ぼくはいやだ。……ぼくは目に見えるすべてが、こんな風であって欲しくないのだ。さしあたりぼくはそれだけが必要だった〉。d.〈だから殺したのだ〉。e.〈後でもっと多くのものが必要になる〉。f.〈ぼくは空想はいやだ。ぼくは行動したい。ぼくは自分で行動したいのだ〉。〔改行〕オランダのピョートル。〔改行〕ぼくはどこへ行き着くか分らない。「g.〈あなたは、お母さんを助けるために、そんなことをしたの〉」。〔改行〕「h.〈いや、全然違う。自分のためだ、自分だけのためだ。ぼくは不正がいやだった〉のだ」。……7-153

② a.〈彼は支配することを望んでいるが〉, b.〈その手段をまったく知らない〉。c.〈少しも早く権力を握って、金持ちになること。殺人の考えはもう出来上がったものとして彼の頭に入った〉。〔改行〕(N・B 〈おれが何者になろうと、後で何をしよう、——人類の恩人になろうと、蜘蛛のように人々の生血を吸うようになろうと——おれはどうでもいい〉)。d.〈おれが知っているのは、支配することを望んでいるということで、それだけで十分だ〉。〔改行〕N・B これをみなラズミーヒンの夜の集りで表現すること。7-155

③ 支配するために。〔改行〕ラスコーリニコフは, a.〈権力を握るまでにあまりにも多くのいまわしいことを重ねなければならないから、後に償うことはもうできなくなると指摘されると〉, 嘲笑しながら答える。〔改行〕「どう致しまして, b.〈後で多くを善行すればいいのさ、それから+と-を差し引きすれば、あるいは、善行の方が多いいということになるかも知れません〉」〔改行〕その後で、憤激しながら、「c.〈おれは何も善行などする必要がない。おれは自分のためにやったのだ、そうとも、自分のためにだ〉」。〔改行〕(d.〈要するに、出口はなかった〉。) 7-159

④ N・B ソーニャとの対話に、「a.〈ぼくは彼らに善を望まない。ぼくは善のためじゃない、権力のためだ〉」。〔改行〕「b.〈でもあなたは善いことをしています〉」。〔改行〕「c.〈権力を握るためだ、善いことをするためには、その前に

権力が必要なんだ。どうだ、d.〈君がそんな風に街を歩きまわるのは、いいことか。ポーレチカもそうなる。ぼくは黙って脇を通り過ぎるのが嫌なんだ〉…
… e.〈みんなのために法律が必要だ〉。f.〈だが選ばれた者のためには要らないのだ〉。g.〈罪のためには苦悩がある〉」。7-170

C 3 a.〈ぼくはそれを好かない。そこには高潔なものは何もない〉。b.〈ぼくは専制者だ——すべての者を嫌悪する〉。7-183

N-4-1 動機 (4). 金品の処理

準備資料 (1). ~ (3). には、強奪した獲得物の処理についての覚え書きが多数目に付く。これらの文と単語の内容は、A, 強奪した財貨を利用する, B, 強奪した財貨を放棄する, の正反対の選択に分けられる。物取りの側面が動機の説明の回路の中でどのような位置に置かれ、また取り扱われているかを検討しよう。……

N-4-2 準備資料 (1).

A 1 〈財布を引き出した〉。それがどんなであったかを、少し思い出す。母の手紙。彼のすべての歴史と殺人のすべての動機。……7-76

B 1 注意 [改行] (1). a.〈財布の中を見なかった〉。[改行] (2). b.〈しごくやすやすと断念した。一体、何のためにおれは殺したのか〉。[改行] (3). あんな難しいことがなんと容易にできたことか。7-77

A 2 ……a.〈財布を掘り出した〉。N・B [改行] 財布を掘り出した。「b.〈この財布をおれはあの時、もう絶対に手を触れるまいと思って埋めたが、いまほらこうして手にしてしまった〉」7-78

A 3 Prospectus No.2 [改行] 夜更けにもどって来た。大声で笑った。夜、夢。朝、目をさまして、昨日痛飲したことを思い出した。しかしまだかなりの金 [母の送金のはずである=引用者] が残っていた。a.〈財布を見に行った、ポケットに納めて〉、群島へ向った。…… b.〈金を調べに出かけた〉、すると奇

妙なことに、犯行の現場をまざまざと思い出し、われながら驚く。自分をいかに導こうと思ったか、c.〈金は触れてはならない〉、等々。……d.〈財布の中から彼に金を与えた。後に石の下の財布の中へ入れた〉。〔改行〕それから、街頭の後、ラズミーヒンのところへ。その後「卑怯者、卑怯者、e.〈卑怯者、ナイフの下から入手した金を与えた〉」。7-80

A 4 「a.〈可哀そうな母、可哀そうな妹！ おれはあんたたちのことを思ったのだ。もしそこに罪があるとしても、おれはそれをわが身に引き受けることを決めたのだ、ただあんたたちが幸福になりさえすればいいのだ〉。b.〈金が少ない、失敗した、でもこれでもおれの助けになるだろう、そしてやがてあんたたちの支えになる、おれは立派な人間になる、だが金だ、金だ、なによりもまず金だ〉」7-83

B 2 「いや、〈おまえは金なしで立派な人間になれ〉。分っている、その考えは分っている……」7-83

A 4 〈誰が哀れんでくれるというのか。しかもおれを、卑劣な、下司な、金銭欲につかれた人殺しを、こんなおれを、どうして哀れまねばならんのだ〉。7-85

B 3 おれは自分のプログラムを作成した。(完全に気力を取り戻し,) a.〈仕事に没頭する、働く、靴直し、手職を身につけるか、あるいは株式取引所へ行く。……仕事を探す。何年も、何十年もわき道に外れぬことだ。人びとに何も頼まないし、かれらの友情と愛を必要としない。人びとなしで生き抜く。若き日のささやかな滑稽な罪に対して、山のような善と利で支払いを済ませて、誇り高く死ぬ〉。b.〈老婆の金には手を付けない〉。c.〈つまらぬ、すべてはつまらぬことだ——恐れることはない〉。〔改行〕だがマルメラードフの娘への愛の成長が、彼を迷わせる。7-90

A 5 ……夜遅く彼は封を切っていない母の手紙だけを持ち、金は主婦への払いにするために鍵を掛けていない戸棚の引出しに残す。行って、〈石の下から財布を取り出す。クレストフスキー島で数える〉。それから母の手紙を読む。

それから自分を裁く。気を取り直す。自分の犯行の分析、「いや、それは違う。おれは殺す権利など持っていなかった。しかし一切の責任を取ろう」。……7-91

A 6 N・B 熱に浮かされた最後の幻想の中で、不意に自分についてこう言われるような気がする。「a.<馬鹿、そんなこともできなかったのか。殺すことは殺した、しかし盗った金は百ルーブルだけだ。おじけづきやがって>」。b.<母、妹、田舎での噂話が想像される。人殺しの妹>。……7-92

A 7 『告白』への注 [改行] N・B a.<さあ、出て行って自白してみろ、理由なしに殺して、二百八十ルーブルの金と二十ルーブルの品物を取った、馬鹿など皆に言われるだろう>。b.<もし一万五千取るとか、クラエフスキーを殺して盗んだなら、誰も笑わないだろうし、目的は分るし、おれが大きな目的を持っていたことを信じてくれるだろう>。c.<だが今は嘲笑と侮辱をさえおれは耐えねばならない。馬鹿野郎、何の役にも立たない殺しをやって、と言われるだろう>。d.<二百ルーブルで自分を保証し、みんなを幸福にすることを夢に見ていたとは。それを説明しても、誰もおれの計画を信じないだろう。ああ、恥辱、恥辱！ 最もいまわしい屈辱からも、おれは逃れられないだろう>。7-92

A 8 N・B (あそこには五千くらいあるだろう、とおれは思っていた。) 7-92

N-4-3 準備資料 (2).

B 4 (行間に。だっておれは、おれがあのお婆の上に落下した煉瓦だということが分っていたじゃないか。……ウム、しかし未解決の問題がたくさんある。ここで実際に、一つの疑問がきわめて鮮明に彼の前に現われた。そのために彼は並木道の真ん中に立ちどまって、考えこんでしまったほどだ。それは単純な一つの疑問だった。「a.<もしあれが、馬鹿のようにではなく、意識的になされたとしたら、一体どうして今までおまえは財布の中をのぞいて見なかったのだ、何を手に入れたか知ろうともしないのだ>。b.<それどころか、あっさりあの財布を河の中へ投げこんでしまおうとしたではないか。そんなことなら煉

瓦になることも、自分でこれまであれほど苦しむこともなかったと、考えもしないで……」と彼は考えた。良心を信じるべきか。「c. <そうだ、おれはあまりにも気力を失っていたのだ、おれは病気なのだ、事実を耐えられなかったのだ>」とついに彼は断定した。「でも治るさ……」と彼はまた強情につぶやいた。欄外に。ネヴァ河。こんなつまらないことがこれほど彼を悩ませることができるとは、彼はまったく考えることができなかつた。) 7-121

A 9 マルメラードフのところから戻ってからの彼の祈り。謙虚に。『主よ、もし誰にも必要のない、めくらでにぶい老婆に対するこの計画が、罪 grekh であるなら、その後にあたしは自分を捧げようとしていたのですが、わたしを摘発してください。わたしはきびしく自分を裁きました、虚栄心ではありません。もし虚栄心にしても、それは許容されるべきです。なぜあなたはわたしに力を与えたのです。<この金がなければわたしは生きられなかったのです>』 7-132~133

B 5 ラズミーヒンは言う。[改行]「どこかへ行ってしまえ」[改行]「だが金はどこにある？」[改行]「a. <婆さんの金が>」相手は彼の顔を見つめた。[改行] b. <彼は最後まで財布の中のをのぞきもしない> (このことは最後の章で)。 7-134

B 6 婚約者に金を返さなければならなくなった時、a. <彼は自分の金を数えに走る>。ラズミーヒンが都合した。b. <彼は自分のを数えることができなかつた>。晩にラズミーヒンが翻訳の仕事の計画をつくる。みんな喜ぶが、彼は喜ばない。 7-137

A10 (欄外に。母は言う、妹はおまえのために犠牲になるんだよ。彼は、いらぬ！ そんな必要はない！ 婚約者との口論を計画する。ラズミーヒンも同席。婚約者は怒って、去る。ついで妹に手紙。妹から返事。金を返さねばならない。<彼は金を数えに走る>。ラズミーヒンが三百ルーブルを都合する。) 7-140

〔老婆の資産について〕 老婆は肺病。遺言書、全財産を自分の魂の供養のた

めにノヴゴロド県の修道院に寄付。百ルーブルをリザヴェータの魂の供養に。

7-141

B 7 (N・B 彼女は彼の告白の途中で訊ねる「a. <お金はいくらありました。どうして自分でそれを知らないのですか。見なかったの>」そして不思議そうに彼を見た。こうして彼はその後 [Veuve Capet の問題のとき] 自問する、「b. <うん、それでは、おれはどうして財布の中をまだ見ていないのか>」) [改行] c. <そして別れ(自首)の前にはじめて財布を隠し場所へ行って、金の少ないのを見て、さびしく苦笑する>。[改行] <その後最後に近いころになってようやく、財布の中味を調べる>。7-143

N-4-4 準備資料(3).

B 8 ……婚約者から手紙。ラズミーヒン三百ルーブル工面する。a. <彼は自分の金を取り出すことができないことに絶望する。一人きりになって、自問する。どうしてこんなに長く取り出さなかったんだ>。b. <どうして水の中へ>。c. <どうして今、どこかで工面したと言って、差し出す勇気がなかったのだ>。7-148

A11 ラズミーヒンのところの集まりで、a. <しっかりした道につくためには、はじめに保証(五千)を持つことが必要なのだ、これが肝心なのだ、さもないとおれを卑しめ、媚びたり、へつらったりしなければならなくなる、と言う>。[改行]「あなたはその保証を大きいと考えますか」(ザミョートフ、予審判事)[改行]「b. <あなた方は興味をお持ちのようですね。五千あれば十分ですよ、三千でも>」(それで何ができるかの描出、力をのばし、自由を守る、そしてその反対に、レベジャートニコフに金がない場合にルージュンの前で卑屈になる場合)。7-150

A12 小説への NOTA-BENE [改行] (1). その後、小説の間中、次の考えが彼を苦しめる。「<おれは自分と母の生活を保証しようとした。ドイツ式の方法では間に合わなかった。おれは罪と苦悩をわが身に引き受けた>。7-166

B 9 a. <ところがおれは第一歩から何もなしとげることができなかった。——うまく盗むことさえできなかった> ——b. <これは、この仕事がおれの仕事でなかったという証拠だ、それにすべての仕事、すべての方法が間違いだった。この道を歩んではいけないのだ>」。7-166

B 10 「a. <お婆さんを殺してあなたは何をえましたの>」。[改行] 「b. <あれは馬鹿げたことだった>」とラスコーリニコフは言った。「c. <ぼくは金も盗ることができなかった>。馬鹿げたことですらない。d. <あれは渴望だ。あのこと全体の中に思想が熟したのだ——これが重要なのだ>」。[改行] 「どんな思想ですの」。[改行] 「一緒に行こう」等々。7-181

A 13 彼はソーニャに、「ぼくは待つのはいやだ。ぼくは今すぐぼくの人間の権利が欲しいのだ。<ぼくはみんなに金を与えずに、黙って通りすぎることをできない>。ぼくは社会主義者たちとは違うのだ。<それにぼくは何も要らない、ぼくは支配したいのだ>。<ぼくは今大学生だが、十年後には>。7-188

〔注〕

(9) 拠典は注(2)に同じ。そのうちТОМ СЕДЬМОЙ, Рукописные редакцииを参照。

この動機論序説(1). 第三回の論述の前提とした『罪と罰』創作ノート成立の歴史的データと内容についての知識は次の通り。

創作ノートのテキストは、破棄された最初と第二回目の原稿の一部およびその断片と、二、三語から数行までの個々の覚書(プラン、梗概、人物の性格、そのリスト、主要な、また部分的なアイデアの形成、会話のメモ、場面)からなる。

第1稿には、1865年9月に出版者カトコフへ提案された第1(短い)(中編)稿のほぼ完全なテキストの部分と準備資料(1)が納められている。「第1稿 残存原稿断片」の小見出しのもとに引用したものはこれからである。第2稿の残存原稿は、第2(拡大)稿のはじめである。このはじめには『裁判を受けて』の見出しが付いていて、犯罪人の告白の形式をとっている。これもまた草稿であり、欄外に、著者自身のための多数の覚え書きがあり、行間には抹消された代りの、時には抹消されずに、単語や文句のバリエーションが挿入されている。本稿ではこれらが特に断わりなしに引用されている。

第1稿(中編)の自筆原稿と準備資料(1). について言うと、これはある犯罪の心理的報告書という形で一人称で書かれた最初の原稿と、それに関わる覚書、小説の

概要その他であり、時期は8月から10月下旬にかけてのものである。

動機という面からこれらの材料を見るとき、主人公の告白という性格上、なぜ殺人をしたかという過去形の叙述に終始して、「これから、なぜ、やろうとしているか」という未来形とか「いま、なぜ、やりつつあるか」という現在形の叙述は見当らない。

最初の稿はドストエフスキーが編集者カトコフ宛ての手紙(1865年9月前半)の構想に一致する。マルメラードフ一家の物語とは関係のない「一つの犯罪の心理的報告書」を内容とする中編であり、主人公についての概要は次のようであった。(1). 彼は「未完成な」思想にかぶれて、自分のいまわしい状況から一挙に抜け出ようと決意する。(2). 彼が殺そうとする老婆は、彼の目から見て「何の役にも立たない」「誰にとっても益にならない」存在である。(3). 彼の企図は、強盗殺人を働いて得た金で母親を仕合わせにし、ある地主の家庭教師として住みこんでいる妹を救出し、自分もまた大学を卒業して外国へ行く。その後は一生涯、人類に対するヒューマニスティックな義務を遂行し、こうして犯罪は償われる、というのである。(4). 彼はまったくの偶然によって、犯行を手早く巧みにやりとげてしまう。ところが(5). 犯行の直後から、人類との断絶感、分裂感というものが彼を打ちのめし、神の真理、地上の掟が働き、彼は結局のところ、自首せざるをえなくなる。犯人は自身の犯行をあがなおうとして、みずから苦悩を引き受ける決心をする。(6). およそ犯人は自分でも精神的に処罰を求めているものだ。すなわち、(1).～(6).のうち(1).～(4).は原因であるのに対して、(5).～(6).は結果であり、『罪と罰』という題名に見合っている。

残存第1稿に見える犯行日時とその後の行動の設定は次のようであった。

6月9日	犯行
10日	人事不省
11日	“ ”
12日	“ ”
13日	
14日	深夜に手記を書き始め、4時間書き続ける。
15日	
16日	残存第1稿の第2章現在。(最終稿のII-1現在)

第2稿は、第2手帳の内容であり、時期は10月下旬から12月にかけて書かれた。この内容のほとんどすべての資料は、小説の第二稿に関連するものである。第2稿『裁判を受けて』は第1稿と同じく一人称の告白小説の形をとっている。準備資料(2).はこの小説の創作の歴史において重大な変更が行なわれたことを記録している。11月末にはほぼ完成していた原稿を焼却して「新しいプラン」に変更、さらに

最終決定の三人称形式「もう一つのプラン」に移行する。こうして12月、最終印刷稿の第1部と第2部のはじめが『ロシア報知』に引渡された。

第3稿は1866年全期にわたって小説の進行と平行してノートに書かれた。ここには初期にアイデアとして取り上げられていた算術の方程式に加えて、ラスコーリニコフの権力指向が結合された。このことを示す四通りの梗概が N-3-5 に引用されている。